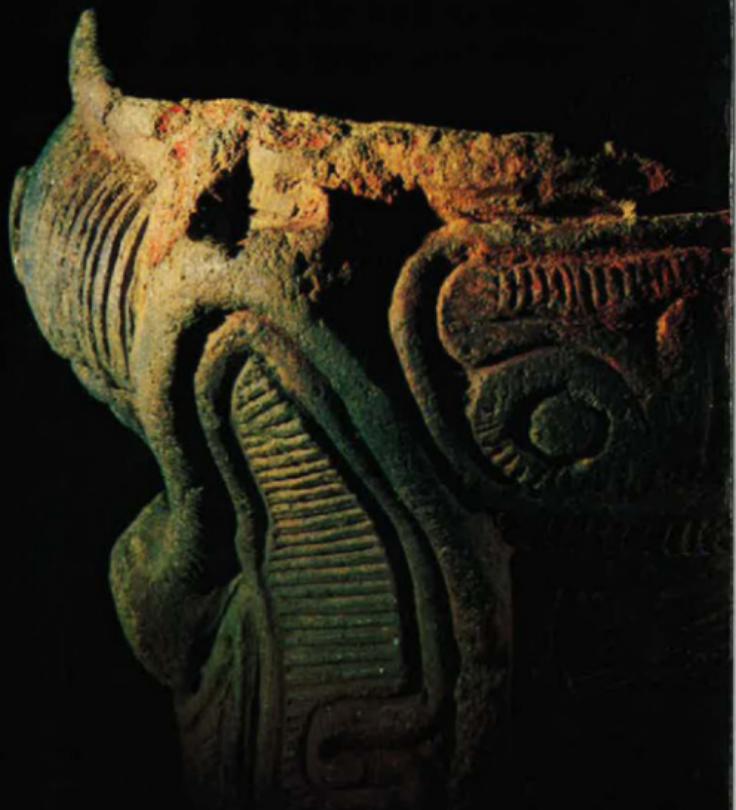


秀頃の発掘



表紙 小型の縄形土器
縄文時代の竪穴住居跡より発見
—芳賀北部団地遺跡・昭和49年2月・
高さ 約10cm—

題字 前橋市教育委員会
教育長 金井博之

芳賀の発掘

〈写真集〉

昭和56年度

前橋文化財研究会

はじめに

昭和48年度から始まった芳賀地区での発掘調査も、8年という長い歳月をかけて、昭和55年度によく終了することができました。

この発掘調査も、調査開始当初から市当局、前橋工業団地造成組合、地元の方々等この事業にかかわる多くの人々のご理解とご協力があったからこそ完遂できたものであります。調査も無事終了した今、改めてこれら関係の方々に厚く感謝する次第です。

「芳賀」という地名は、1,000年余り前に書かれた書物にも出てくる古いものです。この由緒ある地域の一画で、芳賀北部、西部、東部と三つの団地造成地内のほぼ全面を対象にした今回の調査は、その成果の上でも多くの貴重な資料を得ることができました。

迨い昔、芳賀の地に居を構えた人々の生活の跡、日常使用した食器、田畠の耕作にはげんだ様子を示す縁や砥石など多くの資料が掘り出されました。現在これら資料の整理をすすめておりますが、その量も多く、終了までにはまだ年月を要します。

今回ここに収録したものは、多くの資料のうちの一部にすぎません。しかし、たとえ成果の一端であっても、できるだけ早く公表し関係していただいた方々のご協力に報いたいものと思いここに刊行する次第です。

この写真集を前に、古代の芳賀の人々の暮らしに思いをはせていただければ幸いです。

昭和56年6月30日

前橋市教育委員会

教育長 金井博之

例　　言

1. 本書は、団地造成にともなって、昭和48年度から昭和55年度にかけて発掘調査した芳賀北部団地遺跡、芳賀西部工業団地遺跡、芳賀東部工業団地遺跡より出土した遺構や遺物の写真をまとめたものである。
2. 本書の構成は以下のようになっている。
 - (1) 写真編　　遺構や遺物を時代ごとに紹介している。そして、各時代の初めには、その時代の概観をおく。
 - (2) 解説編　　発掘調査についてまとめた「芳賀の発掘」と、掲載写真一点ごとに解説した「写真の解説」とからなる。
3. 遺構や遺物は数多くあるもののうちから、その時代を代表すると考えられるものを厳選して載せた。
4. 時代の区分は、縄文時代、古墳時代、奈良・平安時代、鎌倉時代以降としたが、時代の中で遺構や遺物の配列については、新旧関係を問わなかった。
5. 写真の解説は巻末にまとめ、平易な文章表現を心かけた。
6. 遺物の写真撮影は、主に宇賀達男氏による。
7. 本書の編集は、前橋市教育委員会社会教育課文化財保護係が行った。また、監修を松島榮治氏(前橋市文化財調査委員・県立第二高校教諭)にお願いした。

目 次

赤城山のふところに抱かれた芳賀の地

縄文時代	3~12	古墳時代	13~24
縄文土器	3	芳賀東部1号墳の石室	13
石斧	4	盛上の様子(芳賀東部1号墳)	14
縄文時代の竪穴住居跡	5	発掘前の古墳(")	
敷石住居跡	6	遺物の出土状況(")	15
縄文時代の土器	7	出土遺物(")	
縄文土器にみる文様	9	古墳群(芳賀西部工業団地遺跡)	16
幾何学文様をもつ縄文土器	10	古墳より出土した土器(")	17
石器	11	箱式棺状石室・埴輪棺(")	18
いのししの顔	12	勾玉、管玉	19
石皿と磨石・蜂の巣石		古墳時代前期の竪穴住居跡	20
		古墳時代の土器	21
		土器の出土状況(160号住居内)	23
		復元なった160号住居の土器	24

奈良・平安時代	25~40	鎌倉時代以降	41~42
大甕	25	永楽銭	41
奈良・平安時代の竪穴住居跡	26	墓跡・五輪塔(空・風輪部)	42
かまと跡	27		
羽釜	28		
貯蔵穴	29		
発掘風景	30	昭和55年度発掘調査区全体	
竪穴住居跡のあつまり	31		
掘立柱建物跡・建築作業の様子	32	芳賀の発掘	45
奈良・平安時代の土器	33		
墨書き土器・ヘラ書き土器	35	遺跡の位置図	46
製鉄跡	36		
鉄製品	37		
巡方・丸瓶	38	写真の解説	48
砥石・鍾錐車	39		
親子体験発掘	40		





赤城山のふところに抱かれた芳賀の地



赤城山南麓に広がる芳賀の地。そこには縄文時代から現在に至るまで、人々の生活が管々と展開されてきている。

航空写真・昭和25年8月撮影



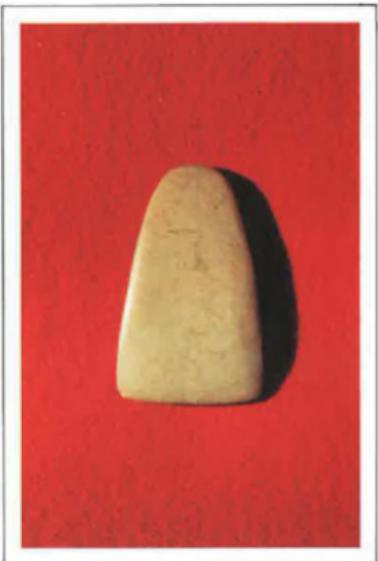
縄文時代（今から約10000年～2300年前ごろ）

表面に縄目の文様をほどこした土器に代表される縄文時代、人々は野山にいのししやしかを追い、木の実をとる。こんな自然相手の生活が約8000年も続いた。

雄大な赤城山のふところに抱かれた芳賀の地は、縄文時代の人々にとって、ぴったりの土地だったのだろう。

米作りが始まったとされる弥生時代、人々は稲の作りやすい低地の方へ移っていったのかも知れない。このころの人々の生活の跡は、芳賀ではまだ発見されていない。

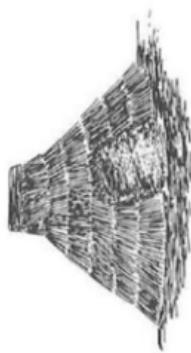
▲ 縄文土器
高さ 約34cm



▲ 石 茅
長さ 5 cm

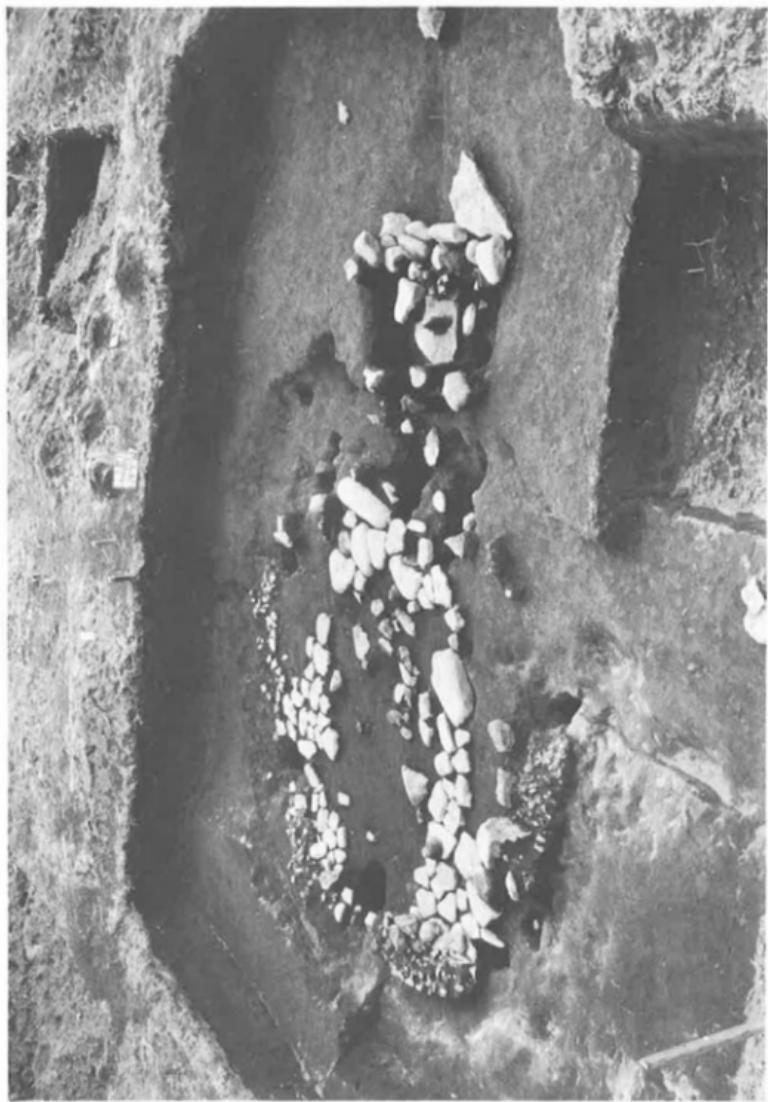


▲縄文時代の竪穴住居跡
約7m×6m



▲竪穴住居の復元想像図

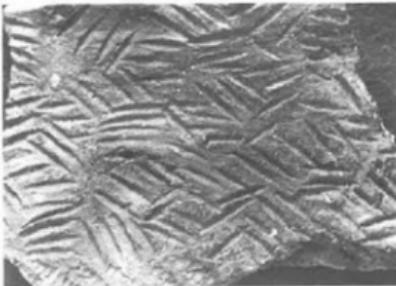
▲ 磷岩層
地盤 約4.3m







▲ 猪文時代の土器



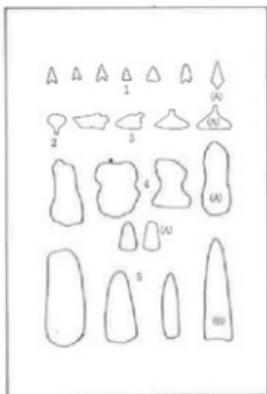
▲ いはくの はんじ
▲ 輪文土器にみる文様



◀幾何学文様をもつ縄文土器
高さ 約27cm





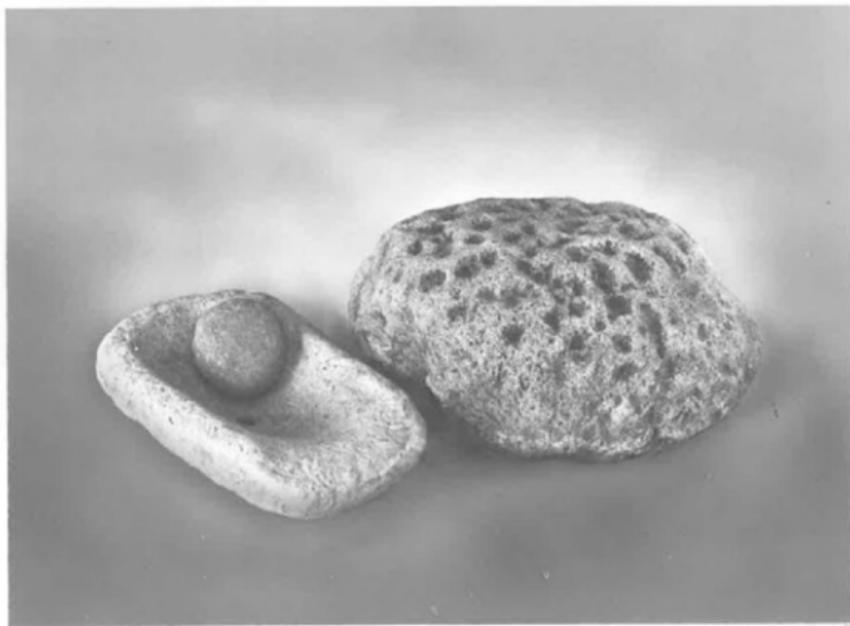


1. 錐 (やじり)
(A) 長さ 4.8cm
2. 石 錐(いしきり)
3. 石 匹(いしさじ)
(A) 幅 6cm
4. 石斧(有製)(いしおの(だせい))
(A) 長さ 12.5cm
5. 石斧(磨製)(いしおの(ませい))
(A) 長さ 5cm
(B) 長さ 17.5cm



▲ いのししの頭
長さ 約4cm

◆ 石器



▲ 石皿と磨石、斧の巣石
長辺 約31cm 約37cm×25cm×20cm



古墳時代 (今から約1700~1300年前ごろ)

盛土をして造った古墳に代表される古墳時代、群馬県は全国でも古墳のたくさんある所として知られている。

芳賀の地にも、赤城山を背にして大小の古墳があったことは、昭和10年の一斉調査や地域のお年寄りの話からわかる。

また、このころの堅穴住居跡からは、文様のついていない赤褐色の素焼きの土器(土師器)が見つかっている。

▲ 芳賀東部 1号墳の石室
幅 約185cm 長さ 約335cm



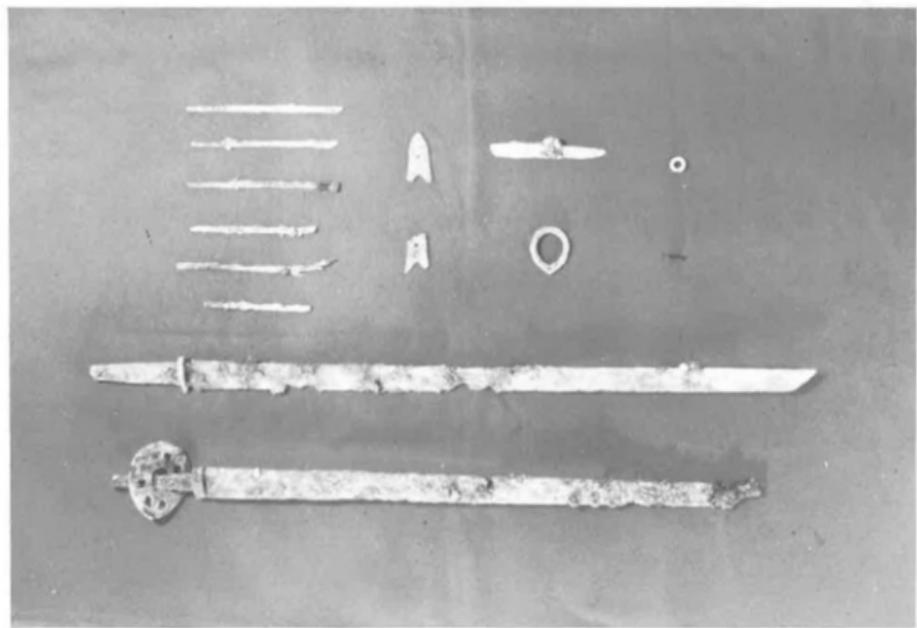
▲ ほづら 古墳 (芳賀東部1号墳)



▲ 発掘前の古墳 (芳賀東部1号墳)



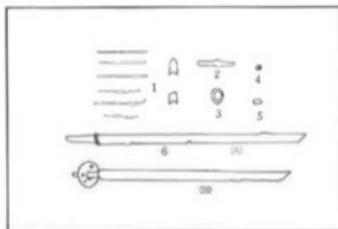
▲ 遺物の出土状況（芳賀東部1号墳）



▲ 出土遺物（芳賀東部1号墳）

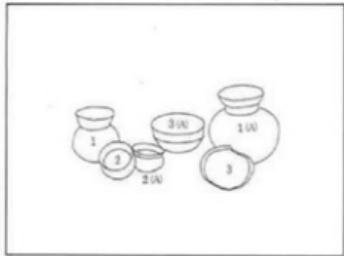


▲ 古 墳 群 (芳賀西部工業団地遺跡)
直径 約13m～4m



1. 鉄 繫(てつぞく)
2. 刀 子(とうす)
長さ 12cm
3. 刀の金具か(かたなのかなぐ)
4. 耳 環(みみわ)
5. 管 玉(くだたま)
6. 直 刀(ちょくとう)
(A) 長さ 74cm
(B) 長さ 68cm





▲ 古墳より出土した土器
(芳賀西部工業団地遺跡)

1. 壺(つぼ)
(A) 高さ 約21cm
2. 小型の壺(こがたのつぼ)
(A) 高さ 約5.4cm
3. 坯(つき)
(A) 高さ 約7.5cm



▲ 箱式棺状石室
(芳賀西部工業団地遺跡)
幅 約30cm 長さ 約138cm



◀ 墓輪轂
(芳賀西部工業団地遺跡)
幅 約30cm 長さ 約85cm



▲ 勾玉、管玉(内長さ 2.3cm)



▲ 古墳時代前期の竪穴住居跡
約 4.5m × 4.3m



1. 長瓶(ながかめ)

(A) 高さ 約30cm

2. 壺(かめ) 高さ 約33.5cm

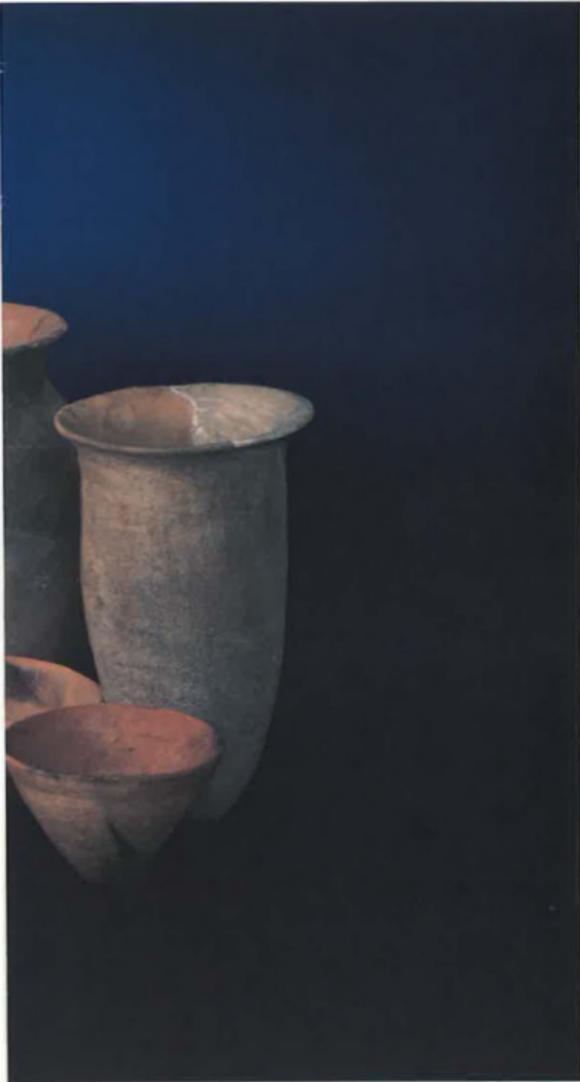
3. 盆(こしき) 高さ 約9.5cm

4. 坯(つき) (A) 高さ 約8.2cm

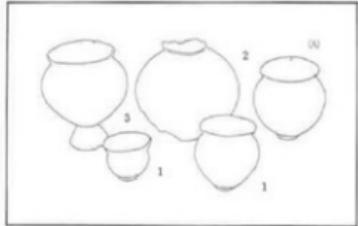
5. 長颈壺(ながくびづば) 高さ 約20.7cm

6. 高环(たかつき)

7. 脚付瓶(きやくつきかめ) 高さ 約22cm



▲ 古墳時代の土器



1. 瓢 (かめ)
(A) 高さ 約21cm
2. 壺 (つぼ)
高さ 約29cm
3. 抱付甕 (きやくつきかめ)
高さ 約27cm



▲ 土器の出土状況 (160号住居内)

▼ 復元なった160号住居の土器





奈良・平安時代（今から約1300年～800年前ごろ）

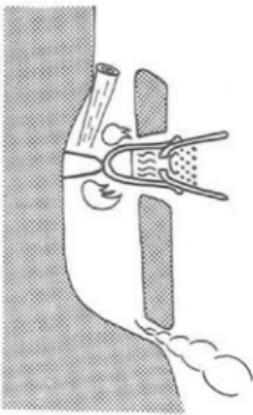
奈良・平安時代の地からは、数百にのぼる当時の堅穴住居跡が見つかっている。住居跡の壁には、かまどが築かれたり、床からは土師器に混じって、多くの須恵器や鉄製品が見つかったりして、生活用具に変化の生じたことがわかる。平城や平安の華やかな都にくらべ、人々の多くはいぜんとして堅穴住居での生活を続けていた。

▲ 大
高さ 約46cm
一塊(最大部)約165cm

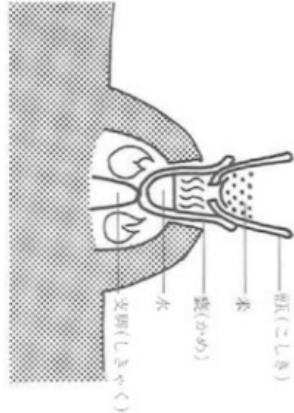


▲ 奈良・平安時代の竪穴住居跡
約 2.8m × 2.4m

かまどの復元図



▲ 断面図



▲ 正面図

▲ かまど跡
長さ 約2.4m





▲ 羽 壺
高さ 約25cm



▲ 貯藏穴



▲ 振る



発掘風景

▲ 一 購



▲ 積石住居跡のあつまり

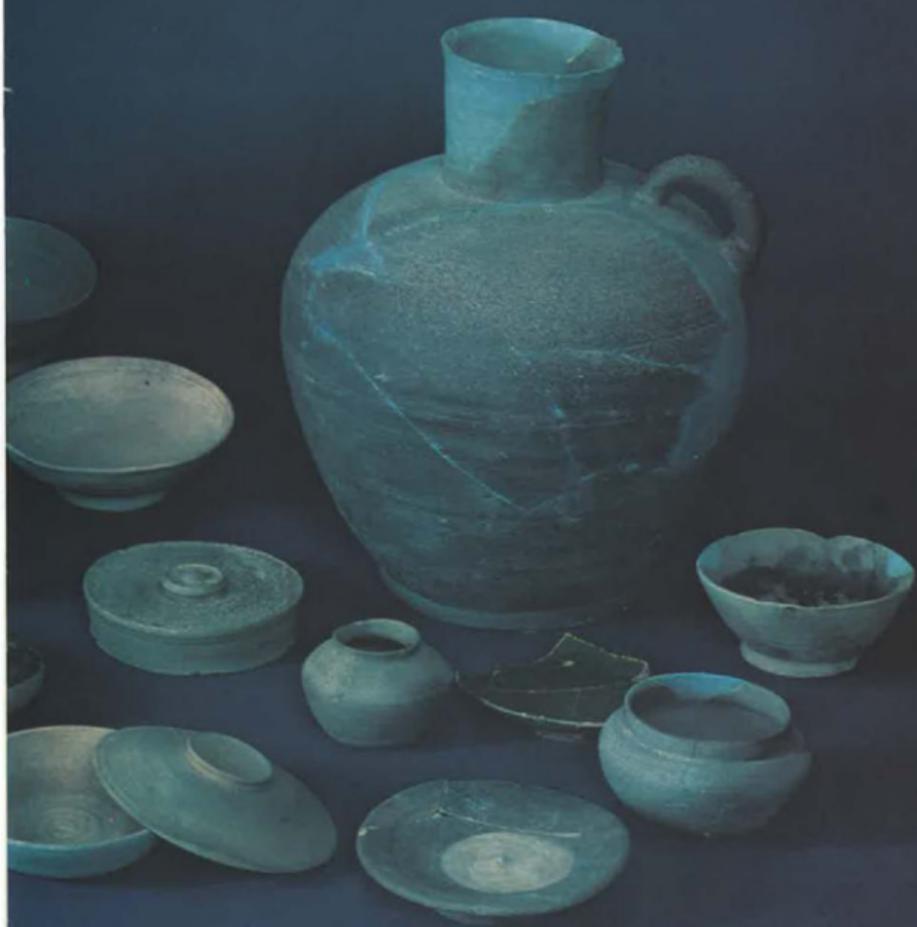


▲ 残立柱建物跡



◀ 建築作業の様子
—春日宮現存殿より—
(鎌倉時代)

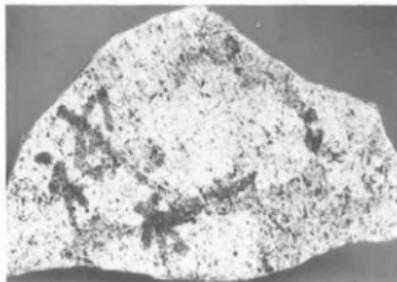




奈良・平安時代の土器



「林 殿」



「神木」



「国」か



「千 万」か

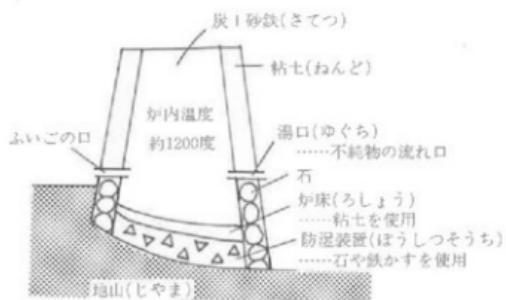


「衙 所」か

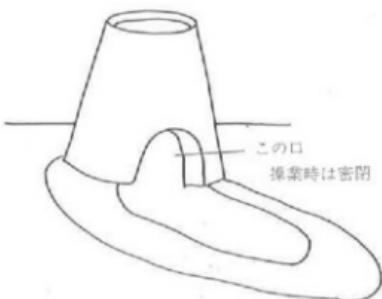


「大」

▲ 墓書土器・ヘラ書土器



▲ 断面図



▲ 見取図

製鐵炉復元想像図 —— 井上唯雄氏教示 ——



▲ 製鐵跡 約3m×4m



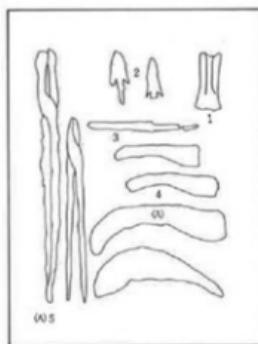


▲ 遷方
3.3cm×3cm



▲ 復元された鋳帶の図
—『東北考古学の諸問題』より—

◀ 鉄製品
(保存処理済)



1. 鉄斧 (てつぶ)
長さ 8.5cm
2. 鉄鎌 (てつざく)
3. 刀子 (とうす)
4. 鎌 (かま)
 - (A) 長さ 約23cm
5. 鉄鉗 (かなばし)
 - (A) 長さ 約40cm



▲ 丸納



▲ 砧 石
(左中)長さ 12cm

▲ 紡錘車のつかいかた
「原始人の技術にいとむ」
国文庫より



▲ 紡錘車
(右下)直径 6.3cm



親子体験発掘
1980・8・24(日)

「発掘は予想以上に重労働だった。移植ゴテなどでみつけているときはいいが、土をはこぶのはまったくつらい。」

けれども掘っていて遺物が出てきたときは、とてもうれしかった。ふだんやっている作業員の人たちは、そうとうきついと思う。」

歴史を解き明かすというのは、まったくじみな仕事だと思う。」

中二・男子



鎌倉時代以降 (今から約800年前ごろ~)

▲ 永樂錢
直径 2.5cm

鎌倉時代以降の歴史を語るものは、城跡や武士の住んだ館跡、そして墓跡などである。

芳賀中学校の南に館の堀跡が見つかった。高台に館をかまえた武士でもいたのだろうか。また、古代や中世にあって集落を作っていた芳賀の地も、何かの理由で荒れ果ててしまい、つい8年ほど前までは一面、畠や桑畠が広がっていた。



▲ 墓跡
約80cm×50cm



▲ 五輪塔（空・風輪部）
(右) 長さ 28cm

昭和55年度発掘調査区全体(芳賀東部工業団地遺跡)

何千年、何百年もの歴史からさめたむかしの人々の生活跡、古地図といふいに生層跡が、
多くが展開されている。

過去において一大集落だった芳賀、現在また住宅団地、工業団地としてよみがえろう
としている。歴史的小道命を感じさせる芳賀の地でもある。 (新井芳賀・昭和55年1月撮影)





芳賀の発掘

赤城山のふもとに大きくひろがるゆるやかな傾斜地は、古代の人々にとっても絶好の生活の場であった。ここに住んだ人々は、いつの頃、どんな家に住み、どんな道具を使い、どのようにくらしをしていたのだろうか。傾斜地に立つて赤城の山を見つめていると、遠い昔へのさまざまな想像と疑問がわいてくる。

芳賀地区で40万m²という広い範囲のほとんど全面を発掘した今回の調査では、こんな疑問を解くための数多くの貴重な資料を得ることができた。ここで掘り出された人々のくらしの跡、日常使用された土器などの道具類の数はたいへんな量であり、現在整理をすすめているところで細かな疑問についてまで解決するにはまだ時間が必要となる。ここでは、遺跡の発掘全体をとおしてみたいくつかの大まかな特長をあげて、まとめにかえることとする。

特長の第1は、繩文時代、古墳時代、奈良・平安時代、さらには、中世・近世から現代にいたるまで、ほとんどの時代にわたって人々の生活の場として利用されているこの地域で、繩文時代の後に続く弥生時代の人々が生活した痕跡だけは、どこにも見当らなかったことである。

弥生時代というと、日本では農耕、特に水田耕作が始められたときである。県内でも高崎市周辺數箇所で、この時代の水出跡が発見されている。井野川などの川の流域、湧き水のある低い谷地等に水に恵まれたところである。水田耕作には水が欠かせない。芳賀の地区は赤城山のふもとにひろがる傾斜地で、今でも畑が多いところである。水田耕作にはけっして適したところではない。水田耕作を知った人々は、水に不便な

この地には住まず、ここより低い平地に移り住んだのであろうか。

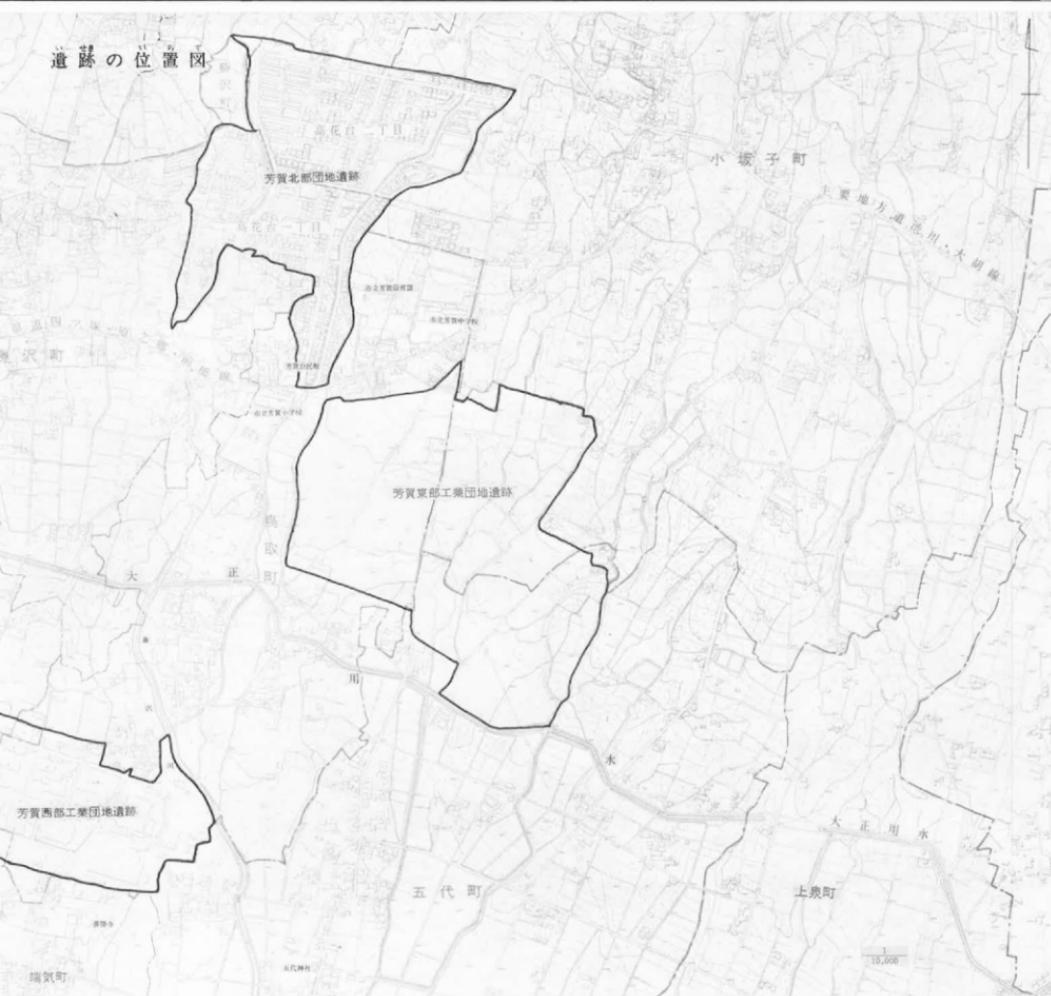
ところが、弥生時代の後に続く古墳時代になると、人々は再びこの地で生活を始める。

特長の第2は、古墳時代に続く奈良・平安時代の住居が数多く発見されており、この時期になって、ここに住む人々が急に増していることがある。発見された住居の跡もこの時期のものが最も多い。水田耕作はもちろん人々の生活を支える基本であった。弥生人が住まなかつたこの地に、奈良・平安時代の人々が数多く生活することができた背景には、農業技術、特に、かんがい技術の進歩が読みとれる。この時代の住居が多く発見された台地の東西には低い谷地がある。この谷地は、現在でも水田として利用されているが、おそらく、奈良・平安時代にあっても、ここを開拓し、水田として利用したものであろう。

特長の第3は、平安時代に書かれた書物「アリヤシマシタ名類聚鈔」に出てくる郷(村)と関係させて考えると、勢多郡内に九つの郷があるとし、その中の一つに「芳賀郷」がある。勢多も芳賀も昔から使用されていた地名である。古い書物に書かれた村落がどこにあったのか現在その位置は明確でない。芳賀郷も同様である。しかし、今回調査した地域に奈良・平安時代の住居が最も多く発見されていることから、この書物との関係を調べる糸口がみつかったと言える。もちろん、調査したところが芳賀郷の中心地と言いかることはまだできない。

今後数多くの資料が整理され、芳賀地区の他の区域の調査がすすめられる中で、もっと多くの、そして細かな事実も明らかになろう。

遺跡の位置図



芳賀の発掘

1. 芳賀北部工場跡

調査面積	約 6.1ha
調査期間	昭和46年5月～昭和50年2月
内 容	縄文時代の堅穴住居跡 27 奈良・平安時代の堅穴住居跡 231 勝沢城跡・その他

2. 芳賀西部工場跡

調査面積	約 2.5ha
調査期間	昭和50年5月～12月
内 容	縄文時代の堅穴住居跡 7 古 墓 跡 31 その他

3. 芳賀東部工場跡

調査面積	約33ha
調査期間	昭和51年5月～昭和55年11月
内 容	縄文時代の堅穴住居跡 58 古 墓 跡 4 古墳・奈良・平安時代の堅穴住居跡 495 立柱建物跡 189 その 他

写真の解説

〈縄文時代〉

P.3 縄文土器

いたたん火を受けるとかたくなる粘土を、人はのがさなかった。

この大見が土器を生み、ものの貯蔵を可能にした。以来、土器は人々の生活を大きく支えてきた。

今から約10,000年ほど前から作られ使用されてきた縄文土器、表面に縄目の文様があるところからこの名がついた。

P.4 石斧

土器よりも前に人との出会いをした石器は、武器となり道具となった。

写真は、縄文時代の竪穴住居跡から発見された磨製の石斧である。芳賀の発掘調査では、こうした石斧が3個ほど見つかっている。

遠いむかし、人の手にぎられた石斧、にぎった人の力を、汗を、においをじっと秘めているかのようだ。

P.5 縄文時代の竪穴住居跡

どうくつやはら穴での生活に別れを告げた人々は、地面を掘りくぼめ、その上に屋根をかけた住居を作った。この住居を竪穴住居という。

住居跡の多くは円形か方形をしていて、直径または一辺が4~5mほどである。人々は床に藁や樹皮などを敷き、寝起きしていた。床からはかの跡が見つかる場合が多い。炉に燃えた火は人々の暖となり、明かりとなり、ものを焼いたりするのに使われたことだろう。

竪穴住居こそ今日の家の原形である。

P.6 敷石住居跡

床に平べったい石を一面敷きつめた敷石住居に

は、出入口を思わせるような突き出た部分をもつものもある。また、床の中央部には石で囲ったがが多く見うけられる。

敷石住居は日常生活のためのものでなく、儀式をする場であったとする考え方もある。いずれにしても縄文時代の中期から後期にかけてしか見られない特殊な住居跡である。

P.7~8 縄文時代の土器

土器は、ひも状にした粘土を巻きあげたり、輪にして積みあげたりして作られた。使用された期間が約8,000年にも及ぶ縄文土器には、貯蔵を中心とした深鉢形土器、浅鉢形土器、そして壺形土器などがある。

土の香りとあたたかみが漂う縄文土器である。

P.9 縄文土器にみる文様

土器がなま乾きのとき、撚ったひもを表面に向転させたりして縄目文様がつけられた。しかし、文様は縄目だけでなく、縁の切り口や貝がらのふちを押しつけたものや、線を刻んだり、粘土をはりつけたりしたものも見られる。

文様からは、土器を一生懸命に作る縄文時代の人々の姿が浮かんでくるようだ。

P.10 幾何学文様をもつ縄文土器

この土器の文様は、現在わかる範囲で横に五分割されている。分割された部分には線がジグザグに走る。しかも、ジグザグのテンボを上段と下段でひとつずつずらして、頂点が接近したりはなれたりすることにより、文様に変化を与えている。

幾何学など全く發達していないかったころ、空間を均等分することの美しさを、そしてバランスをくずして生まれる文様のおもしろさを、人はすでに見い出している。

P.11 石器

人は石の中に斧や鎌の姿を見た。石を打ちかき石斧や石の鎌を誕生させた。人々はこのように石

のもつ特性を知り、最大限に生かして多種多様の石器を作ってきた。

鐵 一矢の先につけ、狩猟や漁ろうに使用。

石錐 木の皮、石などに穴をあけるとき使用。

石匙 一獸の皮をはいだり、肉を切るとき使用。

石斧 ものを切ったり、削ったりするとき使用。

また、土掘りのときにも使用。

なお、石器は製法から打製石器と磨製石器とに大別できる。

打製石器 石を打ちかきながら作った石器。

磨製石器 石を打ちかいたあと、みがきをかけて形を整え作った石器。打製石器よりも新しく出現した技法の石器である。

P.12 いのししの顔

いのししやしかは、縄文時代の人々にとってたいせつな食料だった。

土器の飾りだったのだろうか、いのししの表情からは、豊かな収穫を願った縄文時代の人々の祈りが感じられる。

石皿と磨石、蜂の巣石

木の実などをすりつぶした石皿と磨石（左）。よく使いこんだらしく、石皿の底には穴があいている。また、発火のさい使用したとされる穴、木の実を割るときに固定したともいわれる跡のある蜂の巣石（右）。

縄文時代の食生活の一端がしのばれる。

古墳時代

P.13 芳賀東部1号墳の石室

写真是天井の石が取り除かれた古墳の石室を、真上から見た様子である。石室の石が裏ごめによって、しっかりと補強されていることがわかる。

石室には、入口をもたない横穴式石室と写真的ように入口のつく横穴式石室の二種類がある。とくに横穴式石室の場合、遺がいを納める玄室とそれに通じる狭道とからなり、時による変化が見ら

れる。玄室の入口が両方に広がる両袖型（写真）、片方にしか広がらない片袖型、全く広がらない袖無型の3タイプに分類できる。

P.14 盛土の様子（芳賀東部1号墳）

土を、石を運んだ人の汗がしみこんだ古墳を今ち刻る。そこには、古墳を計画的に築いていった跡が残っている。

芳賀東部1号墳の造り方を資料から推測すると、(1) 玄室になる部分を掘り下げる。

(2) 玄室の最下段の石を組み、裏ごめをし土盛りをする。これを繰り返して玄室の壁を高くしていく。同様に狭道部の壁も築いていく。

(3) 玄室および狭道部を天井石でふたをして、全体的に土盛りをしたり、回りに埴（周堤）を作り古墳として完成させた。

古墳は、当時の土木技術の優秀さをはっきりと語っている。

発掘前の古墳（芳賀東部1号墳）

古墳はその外形から、円墳、方墳、前方後円墳などに分類できる。

この芳賀東部1号墳は調査の結果、7世紀後半に造られた直径約20mほどの円墳と考えられる。

P.15 遺物の出土状況と出土遺物

（芳賀東部1号墳）

石室内から直刀2振り、鏡11本、刀子（小刀のようなもの）1本、耳環と管玉（P19参照）が各1個ずつ出土している。こうした副葬品とともに葬られた人は、いったいどんな人だったのだろうか。

権威の象徴であった古墳も6世紀後半に入ると一部の支配者たちだけのものでなくなる。そして8世紀になると古墳はその姿を消していく。

P.16 古墳群

芳賀西部工業団地遺跡では、堀をもった古墳の跡と見られるものが30ほど確認され、古墳群と推定されている。

土盛りをした部分（須丘部）は、古い時期に削りとられ石室などがはつきりしないものも多い。しかし、耳環や土器など多くの出土品を見た。

P.17 古墳より出土した土器

葬った人に何かを供えたときに使用した器であろうか、赤褐色の土器（土師器・P.21～22参照）が古墳群の周囲から発見されている。

P.18 箱式棺状石室

石で四方を囲み、石のふたをした埋葬施設。

埴輪棺

円筒状の埴輪（円筒埴輪）を二つ合わせて、その中に遺がいを納めた埋葬施設。

P.19 勾玉、管玉

動物のきばのような形をした勾玉、錘の筒のような管玉が、竪穴住居跡などから発見されている。とくに、昭和55年度の調査では、製作途中の勾玉や管玉も見つかり、製造過程を知るうえで貴重な資料を得た。

管玉の穴を観察すると、太さが一様でない。このことは、両端からの穴あけがいかにもむずかしかったかを物語っている。

P.20 古墳時代前期の竪穴住居跡

縄文時代に見る竪穴住居と同じようなつくりをしているが、石で囲った炉ではなく床の上で直接火を燃やしていたようである。

床に見られる四つの深い穴は、柱を立てた穴（柱穴）である。

この住居の中で、空が晴れるのをじっと待った日もあったろう。また、あしたの仕事のことを話しあう夫婦の姿もあったろう。家族の生き様を静かに語りかける竪穴住居跡である。

P.21～22 古墳時代の土器

この時期には、仕事に分業化が見られ、土器を

専門に作る人々も出てくる。この人々は繩文土器にくらべ、文様のない赤褐色の素焼きの土器を焼いた。こうした土器を土師器という。

土師器は再生土器の系統をひくもので、形もいろいろある。

長甕=中に水を入れてかまどにかけて煮沸に使用。甕と組ませての使用もある。

瓢=底に穴があけられ、瓢の上にかけ、瓢の中の米をむした。「せいろ」の原形（P.27参照）

長頸瓶=液体を入れる容器。

砵=食べものを盛った。今日の「茶わん」。

高环=酒などを飲んだり、ものを盛るのに使用。

繩文土器にくらべ、ずっと薄手になった土師器には、用途のちがいによる形のおもしろさが見い出せる。

P.23 土器の出土状況（160号住居内）

火災にでもあったのだろうか、壁ぎわから炭化した木材が多く見つかった160号住居。当時の生活用具（土師器・P.21～22参照）がセットで出土している。

P.24 復元となった160号住居の土器

土器のかけらを一片一片洗い、住居番号を記入して接合する。復元には根気が要求される。

復元の結果は、煮沸に使用した脚付甕をはじめ甕、壺、小甕などであった。こうした土器も160号住居に住んでいた家族の食生活を支えていたわけである。

〈奈良・平安時代〉

P.25 大甕

火災にあったと考えられる住居跡から、須恵器（P.33～34参照）の大きな甕とみられる破片がたくさん出た。復元には一週間ほどかかった。

この中に水を貯えたのだろうか、それとも酒でも醸造したのだろうか。

このころになると須恵器は生産も増え、一般的な竪穴住居跡からも多く見つかっている。

P.26 奈良・平安時代の竪穴住居跡

この時期の住居には、必ずといっていいほどかまどが見られる。そして、その近くに貯蔵穴をもつものが多い。住居の形は方形がほとんどであり、なかには壁の一部を抜張して「張出し部」を作るもののや、かまどのわきに「たな」のようなものももつ住居もある。

床も地山の土とちがった土をつき固めた「貼床」が見られ、住みよいマイホームを作る人々のための努力をしのぶことができる。

P.27 かまど跡

言うまでもなく、かまどはものを煮炊きする施設であり、人々の食生活を支えてきたものである。

かまど跡をのぞくと、火がよくまわるための支柱（支石）、この写真のように石を組んで作った煙出、季節風をさけるためか多くのかまどが東壁に設置されているなど、人々の生活の知恵が随所に生かされている。

P.28 羽釜

かまどにかける土器にも変化が見られ、土器の上部につば（羽）をつけたものが登場してくる。

この中に水を入れてかまどにかける。羽釜の上のせられた紙の中のものを蒸気でむした。近畿地方では上がまとセットになって発見される例が多く、近畿地方の影響を受けて出現したものとも考えられる。

P.29 貯蔵穴

貯蔵穴といっても、大部分は中から灰や炭化物、土器のかけらなどが出てくる。はたしてものを貯蔵したのか疑わしくなってくる。しかし、ときには写真のように漆を利用して作られたものもある。

P.31 竪穴住居跡のあつまり

かまどや貯蔵穴をもつ竪穴住居の跡が、芳賀の地に広く展開されている。竪穴住居跡のあつまりは、いったい何を意味しているのだろうか。

平安時代に書かれた和名類聚録によると、勢多郡には九つの郷が置かれたという。そのひとつに芳賀郷が記されているが、どこに存在したかは現在不明である。これらの住居は郷を構成する一部ではなかったろうか。

P.32 挿立柱建物跡

挿立柱建物は竪穴住居と異なり、地表に柱穴を掘り、柱を立てて屋根をかけた建物である。板の床をはったものもあったようだ。規模は2間×2間、2間×3間のものが大部分をしめている。

芳賀では、こうした建物跡が200棟分ほど発見されている。この中には床を高くして、湿気をきらう米を貯蔵した倉庫もあったと考えられる。

下の絵は鎌倉時代にかかれたものであるが、水糸をはり水平を出している様子や柱穴を掘って柱を立てている様子がよく表現されている。同じような方法で芳賀でも挿立柱建物が作られていったのだろう。

P.33~34 奈良・平安時代の土器

芳賀に見るこのころの土器には、土師器に混じて灰色をした須恵器が多くある。須恵器は朝鮮から伝えられた製法で作られた土器である。古墳などからも出土している。

特殊な窯を使い高温で焼きあげられた須恵器は、土師器にくらべてずっと大きい。また、上蓋のついた灰釉陶器や縁ぬき陶器も発見され、土器の製作技術が一段と進歩したことがわかる。

ところで、須恵器のさかんに使われるようになったこのころになっても、煮沸用には土師器の袋を使ったらしい。そして、食器には土師器や須恵器の壺や皿が主に使用された。

写真中央より左側の赤味がかった土器類が土師器、右側の灰色した土器類が須恵器である。

P.35 曼書土器・ヘラ書土器

墨で文字の書かれた墨書き土器や文字の彫られたヘラ書き土器が発見されている。土器に文字を記した意味は不明だが、5世紀のころ伝えられたという漢字が、地方へ普及してきた様子を語る一資料である。

P.36 製鉄跡

平安時代の集落跡からは、必ずといっていいほど製鉄に関係した跡が見つかる。芳賀でも石組みの炉で鉄を溶かし、この鉄を使って農具を作ったと思われる鍛冶跡が発見されている。

鉄を作った跡からは、炭を燃やすときの送風具であるふいごの口や溶かした鉄を入れるルツボの破片、熱い鉄をはさんだ鉄鋸（P.37参照）そして多量の鉄滓（鉄かす）が出ている。

P.37 鉄器品

石器から青銅器、そして鉄器という世界の歴史の流れをふまに、石器からいきなり鉄器も経験してしまった日本の歴史。この鉄の丈夫さや鋭さは、初めのころ一部の支配者たちだけのものだった。しかし、平安時代のころになると竪穴住居跡から鉄斧、鎌、刀子、鎗などが見つかっている。

このことは、一般の人々も鉄器をもつようになつたことを物語っている。

P.38 巡方と丸鞘

巡方とも丸鞘も鉢帯（ベルト）を飾った金具である。こうした金具で飾られたベルトは、位のあつた者がその腰にしめていたものである。芳賀にも位のある人が住んでいたのだろうか。

鉢帯の実例は正倉院（奈良）に伝えられている。

P.39 砥石

鉄製品の普及は、砥石が住居跡などから多量に発見されることからもうなずける。砥石を腰に下げて田畠の仕事をしたのだろうか、ひもを通して穴のあいたのも見られる。

紡錘車

芳賀の人々はどんな衣服を身につけていたのだろう。実際には布の発見はないが、多くの竪穴住居跡から紡錘車が出土している。紡錘車とは糸を作るとき織機に拂りをかけるための道具で、回転にはすみをつけた。

紡錘車には鉄製、土製、石製などがある。

〈鎌倉時代以降〉

P.41 永樂錢

明（中国）の永樂帝の1411年から作られ発行された銅錢。室町幕府二代將軍足利義満によって始められた日明貿易を通じて、大量に輸入された。そして、室町時代から戦国時代にかけて日本の基本的な通貨となつた。

芳賀ではこうした銅錢が墓跡などからよく発見される。

P.42 墓跡

ときには人骨なども出土する。

五輪塔（空、風輪部）

仏教では全てが空、風、火、水、地の五大要素からなるとしている。この説にもとづいた石塔が死者の供養や墓石として作られた。

芳賀の発掘〈写真集〉

昭和56年8月30日 印刷
昭和56年9月10日 発行

発行 前橋文化財研究会
〒371 前橋市大手町二丁目12番1号
電話0272-24-1111(代表)
編集 前橋市教育委員会社会教育課
文化財保護係内
印刷 有限会社原田印刷所

裏表紙　　けつひょうしき　　袂状耳飾　　たてあみじょうじふく
奈良・平安時代の堅穴住居跡より発見

—芳賀東部工業団地遺跡・昭和53年11月、
直径 4 cm —

